

『ぼくのステキな王子様』

著：桂生青依

ill：日向せいりょう

「ただいまー」

しかし、元気よく玄関のドアを開けたとき。夏芽は、あれっ？ と、目を瞬かせた。

そこには、二足の見慣れない靴(くつ)があったのだ。それも男物の靴。見覚えのないそれに、夏芽は軽く首を傾(かし)げながら自らの靴を脱ぐ。

そしてリビングへ足を踏み入れた途端、

「え!？」

今度は思わず驚(きょう)愕(がく)の声を上げていた。

見慣れたはずの、リビングのソファ。しかし今そこには、まったく予想もしていなかった人物が二人、座っていたのだ。

一人は金(きん)髪(ぱつ)碧(へき)眼(がん)の絵に描いたような美形の外国人。

そしてもう一人は……。

「……ど、どうしてあなたがここに……!？」

なんと、先週シナモンを助けてくれた、あの背の高い男がそこにいたのだ。

頭の中で「？」マークが乱舞し始めたとき、

「おかえりなさい、夏芽」

キッチンの方から飲み物の入ったグラスをトレーに載せた母親が、笑顔で姿を見せる。

その表情は、今のこの状況にもまったく動じていない、いつもの母のものだ。

そして母は、男たちの前に「どうぞ」とグラスを置くと、夏芽に向け、

「ちょうどよかったわ」

と、微笑んだ。

「今から話の本題に入るところだったのよ。ちょうどいいから、夏芽も聞いていなさい」

「話、って？」

「お客さまたちのお話よ」

「僕も、聞くの？」

尋ねると、母は「そうよ」と頷く。

「……」

夏芽は戸惑ったものの、靴を下ろすと、静かに母の隣のソファに腰を下ろした。

事情は今一つわからないが、母が「客」だと言い、話を聞こうというならそれに逆らう理由もない。それに、シナモンを助けてくれたあの人がどうして我が家へやって来ているのか——そのことにも興味があった。

その隣に座っている、まるで王子さまのようなルックスの外国人のことだ。

すると、その外国人が微笑んで口を開いた。

「いいタイミングでしたね。ではさっそく、本題に入らせて頂きます」

その口から飛び出した外見に似合わないほどの流(りゅう)暢(ちよう)な日本語に夏芽が再び驚くと、彼は一層笑みを深めた。

その華やかさに夏芽が思わず頬を染めると、外国人は、「じゃあ夏芽くんへの自己紹介から始めましょうか」と続け、夏芽をじっと見つめてきたまま口を切った。「はじめまして、夏芽くん。僕の名前はマリユス。マリユス＝テュリエ。歳は二十八歳。今はモデルをやっています。どうぞよろしく」

そしてテーブル越しにスッと差し出された綺(き)麗(れい)な手を、夏芽はおずおずと握る。

何がなんだかさっぱりわからないが、隣に座る母はにこにこしたままだし、なんとなく握手しないとまずいと思ったのだ。

しかし、マリユスから視線を移したあの男は——シナモンの恩人である「彼」は、相変わらず無愛想だ。

マリユスのように笑うでもなく、
「高(たか)堂(どう)權(かい)だ」
と、名前だけを短く言うと、それきり黙ってしまう。
夏芽が当惑していると、マリユスが苦笑した。

「ごめんね夏芽くん、こいつ無愛想で」
「い、いえ」

彼が——權が愛想に乏しいということは、先週初めて出会ったときのやりとりからでもよくわかっている。だからそれはあまり気にならないが、どうして彼がここにいるのかはとても気になる。

尋ねようかなと思ったときだった。
「ねえ、夏芽くん。もしかして、夏芽くんはこいつと知り合いだったりするの？ さっき帰ってきて初めて僕たちを見たとき、權のことは知ってる様子だったよね」

マリユスが、訝(いぶか)しそうに言った。その青い瞳は、見慣れないせいかなんとなく怖くも感じられる。夏芽はやや気(け)圧(お)されつつ、こくと頷いた。

「はい。実は、少し前にうちの犬を助けてくれたのが高堂さんで……」
「あら、そうだったの？ シナモンを助けてくれたっていう人のこと？」

すると、傍(かたわ)らから母が尋ねてくる。再び頷くと、「そうだったの、偶然ねえ」と弾むような声を上げたのち、ふふっと笑った。

見ると、母は面白そうに微笑んだまま、夏芽を、そしてマリユスと權を見つめて再び夏芽を見た。

「じゃあよかったじゃないの、こうして会えて。夏芽ったらあの日は『凄(すご)く格好いい人だったんだ、凄(すご)く格好よかったんだ』って、その男の人のことばかり話してたじゃない」

「か、母さん！」

本人の前で何を言うんだよ！ と夏芽は真っ赤になって慌てる。
だが、当の權は相変わらずの冷めた顔で、表情を変えたのはマリユスの方だった。
「そうだったのか。なるほど、そんなことがね」

彫りの深い端正な貌(かお)を更に華やかに彩るように破顔すると、目を細めて夏芽を見つめてくる。

(な、なんでさっきから……)
たびたびじっと見つめてくるのだろう？
(なんだか、目が合わせづらい……)

胸の中で思っていると、マリユスは笑ったまま親指でクイと權を指す。
「ちなみに、こいつも僕と同じ歳。仕事は今は——なんだっけ？」
「……何も」
「何も、ってことはないだろ」
そして一言二言權とやりとりすると、再び夏芽を見て笑った。
「こいつね、今は紀行作家みたいなことやってるんだよ。旅をして、その土地のことを書くような仕事」
「紀行作家……。そうなんですか」
「うん。日本に来てからは知り合いのところでライターみたいなこともしてるみたいだけど」
マリユスの話に、そうだったのか、と夏芽は頷く。
が、そうした話とは別に、さっきからどうも気になることが二つあった。
一つは、權が静かすぎること。そしてもう一つは、同じ年のようなのに、マリユスの方が「こいつ」と、なんとなく權を弟のように…自分よりも下の立場のように、やけに気軽に呼んでいることだ。
とはいえ、權はそれを気にしていないようだから、そういう仲なのかもしれない。
(でもやっぱり気になるかも……)
そう思っていると、
「じゃあ、続けるよ」
さっきまでとは違う、真面目な気配が感じられるマリユスの声が届く。
「は、はい」
つられて夏芽も表情を引き締めたが、その後、マリユスの口から聞かされた話は、あまりに突拍子もなく、驚かすにはられない内容だった。

本文 p27～32 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>